

キリスト教史とウェスレー —英国史の視点から—

野村 誠

1. はじめに

筆者は、長年ウェスレー研究に従事してきたが、これまではウェスレー自身の言葉や活動にのみ注目してきた。しかし、近年、英国を中心とする歴史の流れの中でウェスレー・メソジズムを考え、位置付けることが重要だと気付くようになった。

そこで、本論文では、特に、ヨーロッパ列強国との関係を重視して、長期間にわたる侵略や征服から自主独立を勝ち取ったばかりの18世紀英国に起こったメソジズム運動の意義を考察してみたい。

なお、ここでは、兄John Wesley(1703-1791)と弟Charles Wesley(1707-1788)を一緒にして、ウェスレーと表現する。

2. 産業革命前の英国

英国は、紀元前から、北欧のバイキングの侵略を受けていたが、本論文では、紀元後から概観する。

まず、ローマ帝国による支配は皇帝クラウディウスによるブリタニア征服(AD43年)に始まると考えられる。しかしながら、その後の「ローマの支配に伴うブリタニアの

ローマ化」とは名ばかりで、ケルトの民衆の生活は、公衆浴場や円形演習場などに象徴されるローマ風の都市生活とは縁遠く、田園で牧畜や農耕を営む昔ながらの自給自足的な生活であったと考えられる。

(大野真弓編『イギリス史(新版)』山川出版社 昭和48年、 pp.23-30)

一方、キリスト教は、ローマ帝国によって公認される以前から、弾圧を逃れて、言わば「隠れキリシタン」として、「おそらく二世紀ごろには、ローマの支配のおよばない辺境の地に、ケルト人たちにいりまじって」活動したり、教会を作ったりしていたと推定される。(浜林正夫著『イギリス宗教史』大月書店、1987年、p.21)そして、三世紀以降、ローマ帝政の衰運に伴い、キリスト教は、『ローマの平和』の影の薄れゆくに反比例して、ケルト人の主として下層社会の間にしたいに弘まっていた(『イギリス史』p.30)と思われる。

AD395年の東西ローマ帝国の分裂以降も英国はローマ・カトリック教会の支配下に入っていたが、ローマ帝国の国境はゲルマン人にしばしば侵略され、AD410年には、西ローマ皇帝ホノリウスが、ローマ軍のブリタニア撤退を命じて、事実上、ローマ支配の終結を迎えた。

以後、無防備かつ無政府状態に放置された英国には、次々と侵入者が移住、やがて定住するようになり、ローマ文化の影響は消失した。(同 pp.32-38)

異民族の侵入によって途絶えていたカトリックの宣教と支配は、AD596年、グレゴリウス教皇によって、ローマの聖アンドレアス修道院長のアウグスティヌスが約40人の修道士とともに派遣されたことで、再開される。AD597年、「カンタベリーに司教座をおき、みずからカンタベリーの司教に就任した」アウグスティヌスだったが、布教には困難が伴った。異教徒のみならず、個人の回心を重視したケルト・キリスト教による抵抗も大きく、対応に苦慮した。しかし、ローマ教会は国家権力と結びつくことを通してその地位を強固にしていった。(『イギリス宗教史』 pp.27-31)

「ケルト・キリスト教の布教の方式は、・・・修道院を中心として敬虔な信者を育てると

いうものであったが、ローマ・キリスト教のそれは部族国家の国王たちを改宗させ、その国にキリスト教の制度や儀式をもちこむというやり方であった。」(同 p.29) そのため、「しばしば部族国家間の戦争ともからみ」あい、国王の改宗に成功すれば集団改宗が起こったが、逆に、集団棄教することもあった。(同)

ローマ教会を支持する国王とケルト・キリスト教を支持する聖職者たちの意見の対立を調整する為にホイットビの宗教会議が開かれたが、それは一種のセレモニーに過ぎなかった。この会議で決定権を持つ国王の権力を背景にローマ教会の権威は確立し、「ケルト・キリスト教の没落は決定的となった」とは言え、ローマ教会の組織の整備は、7世紀のテオドロスの出現まで待たなければならなかった。(同 pp.30-33)

他方、侵入した異民族は各地に多数の小さな政治的組織体をつくり始め、移住と征服の戦いの過程で権力を増大させた部族の軍事的指導者は『王』と称せられるようになった。こうして、いわゆる七王国は、6世紀末までに成立したが、諸部族国家間の力関係は、流動的で不安定だった。(『イギリス史』 p.39) 「諸部族国家は、こののち九世紀初頭まで絶えず相互に抗争していったが、その場合注意すべきは、イギリス史上の『英雄時代』にあたるこの時代、これらの諸国がつねに独立の王国として七つながら存したのではない、ということである。ある一国が興隆するとしばしば他の諸国は多かれ少なかれその宗主権のもとに置かれるという事態が繰り返された」(同 p.40) と『イギリス史』に説明されているごとく、諸部族国家の間では、絶えず、優越権をめぐる攻防が繰り返され、「かくしてイングランドの政治的統一への機運が徐々に醸成せられていった」と考えられる。(同)

七王国興亡の過程で、民衆の信仰心は大きく揺り動かされながらも、国家権力の後押しもあって、人々の心は次第にローマ・カトリック教会に帰一し、英国の統一は進んでいった。(『イギリス史』 p.44) だが、七王国すべてがローマ・カトリック教会に組み込まれるまでには、「伝道の手が長く及ばなかったサセックス王国が、ついにキリスト教に変わる」AD 681年まで、「約百年の歳月を要した」。(出村章著 中世キリスト教の歴史) 日本キリスト教団出版局、2005年、 pp.40-41)

7世紀後半、疫病の流行によって教会は荒廃していたが、AD 668年にカンタベリ大司教に任命されたテオドロスは教会組織の確立に尽力した。(『イギリス宗教史』 pp.32-33) 各司教区を巡回し、全国教会会議を開いて大司教の権威を認めさせ、統一的な教会規範を定めるなどの他、教育にも従事。その後、カンタベリを中心に「イングランドにおける本格的な文運の興隆」が認められた。(『イギリス史』 pp.46-48) テオドロスの功績は、「イングランドにその政治的統一に先立って精神的統一を賦与した」とも表現されるほどで、無視できない。(同 p.40)

では、英国の政治的統一は、一体、いつなのか？

AD 829年にウェシクス王であるエグバートがマーシアを征服し、諸王国を従えて、全イングランドに宗主権を打ち立て、単一のイギリス王国の基を開いた時を指す。その時、「七王国いずれもローマ・カトリック教を信仰して」いたことになっている。(同 pp.42-46) エグバートは、「南部海岸地方の全域を単一の永久的な王国たらしめ」、これこそが、8世紀末ごろよりデーン人がしきりにイングランド海岸を襲うようになって、イングランドを守る足場になったのだと思われる。(同)

1066年、フランスのノルマンディ公ウィリアムが英国を征服し、ノルマン王朝が始まる。それ以来、英国は完全な体系をなした封建国家となっていく。(『イギリス宗教史』 pp.40-44、『イギリス史』 pp.64-70)

さて、「ウィリアムはその征服を『聖戦』と称する」。(『イギリス宗教史』 p.40) 英国は、AD 829年以来、精神的にも政治的にもローマ・カトリック教会に統一されているはずなのに、ウィリアムは十字軍の御旗を立てて英国に侵入した。「教皇がなぜウィリアムの征服を支持したのかという理由はかならずしもあきらかではないが」このノルマン征服以降、英国はフランスに支配された。(同)

聖地奪回の十字軍遠征は、1096年から1270年まで約2百年続いたが、英国王として初めて従軍したのは、ヘンリー2世の後継者リチャード1世である。その後継者ジョンがカンタベリ大司教の叙任をめぐる問題でフランスとの争いに敗れて王位はく奪の処分を受け、ついに諸侯の要求に屈して調印したのが、有名なマグナカルタである。(1215年) ここに

において、「臣民の自由の権利の確認とならんで教会の自由と権利の確認」がおこなわれた。
 『イギリス宗教史』PP.52-4)
 十字軍の遠征が消沈しても、戦火が消えることはなかった。

1337年、英国王エドワード3世はフランスの王位継承戦争に英国の兵士を連れて参戦し、その事ご端を發して百年戦争が始まった。

一方、コロンブスの新大陸発見(1492年)以降、大西洋の覇権を握ったスペインは強力な力を持つようになり、英国も脅かされた。スペインの支配は、1588年のアルマダの海戦で英国が勝利するまで続く。

上記のように、英国は自主独立を望んでいたにもかかわらず、大陸の列強国から侵入されたり、支配されたり、絶えず抗争を余儀なくされてきたため、他国からの介入には強い警戒心を持っていた。それ故、外交には慎重であった。

英国の宗教改革は、その発端は、後継の男子が生まれぬことに起因する、ヘンリー8世とキャサリンとの離婚問題にあったが、背景は複雑で、微妙な外交問題が絡んでいた。スペイン国王の娘キャサリンとの結婚は、そもそもスペインとの友好関係を維持する為の政略結婚であった。そのため、ヨーロッパ諸国の力関係に変化が生じれば英国の外交方針も変わり、結婚解消の策を練り始めたのだが、教皇クレメンス7世はそれを認めなかった。そこでヘンリーは、1534年に国王至上法を制定し、ローマ・カトリック教会から独立し、キャサリンの侍女、アン・ブリンと結婚した。

かくして、神学的思想の相違から誕生したルターやカルヴァンとは一線を画する宗教改革となり、「これまでにない新しいタイプのプロテスタント教会」の産声を上げることとなった。(藤本満著『歴史 第1巻』日本基督教団出版 2017年、p.94)

ヘンリー8世の宗教改革の後、エドワード6世がプロテスタント化を進めた。しかし、「王位継承法」によるエドワードの後継者は、ヘンリー8世とキャサリンとの間に生まれた、「血のメアリー」の別称で知られるメアリー・チューダー(1516-58)だった。スぺ

ン出身の母を持つメアリーは一気にカトリックを復活させ、プロテスタントを容赦なく弾圧した。しかし、メアリーの後を継いで、1558年に即位したエリザベス1世は、プロテスタント側につき、「国王至上法」を復活させるなどして、英国国教会を確立する一方で、政治的陰謀を企てたスコットランドの元女王メアリー・スチュアート(1542-87)を処刑した。

ところで、フランスで絶対君主制の教育を受け、宗教改革指導者のジョン・ノックスとは、そりが合わなかったメアリー・スチュアートの処刑は、カトリックであるスペインを立腹させ、英国侵略の口実を与えてしまった。英国の海軍によって新大陸からの輸送船をしばしば略奪されていたスペインは、「無敵艦隊」を派遣して英国に戦いを挑んだが、1588年に英国の海軍がこれを撃滅(アルマダの海戦)。この「無敵艦隊の覆滅によって、エリザベスは国教会を擁護し、国民的独立を全うしたばかりでなく、内においてはイギリス絶対王政を確立することができた。」(『イギリス史』 p.140)

エリザベスは、宗教改革に反対したカトリックに対して、「血のメアリー」のような激しい弾圧は行わず、むしろ、寛大であった。「すくなくとも治世の前半においては、エリザベスの国教会というのはカトリック的な部分をもつつみこんだもの」で、その寛容性こそが彼女の改革の特徴であり、成功の理由であったと言えよう。(『イギリス宗教史』 p.115) このような英国国教会のあり方は、リチャード・フッカーの言葉を借りれば「中道(middle way)」だが、もっと「純粋な教会(pure church)をもとめる」ピューリタンにとっては「中途半端(halfway)」ということになる。(同 p.117) しかも、エリザベスの寛容性はカトリックに対する姿勢であって、カルヴィニストに対しては初めから警戒的で、厳しかった。(同) そのため、「血のメアリー」時代にヨーロッパ大陸に避難していたプロテスタントの亡命者がカルヴィンの思想をしっかりと受けて帰国すると、エリザベスの国教会を批判するカルヴィニストのピューリタンとなって、後のピューリタン革命を起こす勢力となっていった。

エリザベスとピューリタンの対立は徐々に高まり、1570年にエリザベスがローマ教皇によって破門され、カトリック教会から絶縁されるや、改革の好機到来となった。(同

p.119)

エリザベスが即位したころ、「ロンドンとその周辺ではプロテスタント化がすすみ、それ以外の地方、とくに北部においては、カトリック支持が根づよい」傾向が見られた。が、国教会の寛容で緩やかな支配によって、外面的には、徐々にプロテスタント化が定着した。だが、国家と教会が「完全に一体化」(同 pp.114-6)した内実は、むしろ国家権力を後ろ盾に布教したローマ・カトリック教会に似ていた。「政府の側は国教会批判は国家体制への批判につながる」と取り締まりを強化し、もはや、公然と教会改革を求めることは困難になっていった。そこで、「ピューリタンたちは一挙に全国規模で改革をはかることを断念し、地域ごとに個別教会を改革するといういわば下からの改革路線へ転換」していった。(同 pp.120-121)

1603年にエリザベス1世が没した後は、1567年以来スコットランドの国王として長老派教会を公認していたジェームズ6世が英国王を兼ね、ジェームズ1世と名乗るようになった。そのため、ピューリタンから多大な期待を寄せられたが、王は王権神授説を唱えて議会を軽視し、「法の優越」を主張する人民と対立。期待は失望に変わった。(藤本満著『同』 pp.124-5)

ジェームズの息子チャールズ1世の代、失望はピークに達し、ピューリタン革命(1642-49年)が起こる。この内乱でオリヴァー・クロムウェル(1599-1658)は、鉄騎隊率いて勝利し、1649年1月、「王は暴君、反逆者、虐殺者、国賊の名の下に死刑を宣告され、処刑された。『イギリス史』 p.160) さらに、軍隊会議は共和国憲法を議会に提出し、「三月王制と貴族院を廃止し、ついで五月『イギリスは共和国にして自由国』なる旨を宣言した。」(同) こうして、議会による共和制は立ち上げられたが、「新しい長老は古い司祭がいっそう激しくなったもの」と揶揄されるほど失望を買った。なぜなら、「主教制が長老制になり、39宗教箇条がウェストミンスター信仰告白になっても、それは上からの強制的統一であって、信仰の自由」が許されていなかったからである。(藤本満著『同』 pp.138-9)

専制打倒の旗印を掲げて出発したはずの革命は、その目的遂行の後、クロムウェルの王政に墮落し、議会の権利と法の回復のために出発したはずの革命は、軍事独裁となり、そしてピューリタンの「厳粛主義的雰囲気がかえって自由を求めるイギリス国民に耐え難いものとなって、イギリス人民が自由な人間性と王政の伝統に返ることを熱望するに至り、王政復古の土壌ができて上がった。(『イギリス史』 p.166)

1658年にクロムウェルが病死すると、「軍人政治に対する嫌悪と反革命の機運が濃厚」となり、1660年、スコットランド軍司令官は、オランダ亡命中のチャールズ(1世の子)と平和交渉を始めた。(同 p.165)

同年、チャールズは帰国し、チャールズ2世として王政を復古。時勢に逆行して、絶対王政への道を選択した。(同 pp.165-72)

「王政復古によりチャールズ2世と、次代の王弟のジェームズ2世も、愚かなことに再び王権神授説を掲げようとしませんが、議会の方が強力でした」と藤本満は語っているが(藤本満著『同』 p.139)、このことは、ジェームズ1世の時代に比べて、ピューリタン革命を経験した議会は、期待と失望の中で、大きく成長したことを物語っている。

ジェームズ2世の冷酷な暴政は、「国民の間におぞしい反感と恐怖をまき起し」、1688年、ジェームズは、ついに王位を追われてフランスに亡命した。これを「名誉革命」又は「無血革命」と呼ぶのは戦闘の被害が極めて小さかったことによる。(『イギリス史』 pp.172-75)

名誉革命が「生みだした成果のひとつは信仰の自由を法的に確立したことであって、それが1689年の宗教寛容法である。」(『イギリス宗教史』 p.178)「この宗教寛容法はけっして信仰の完全な自由をみとめたものではなかった、・・・いろいろな限定を残しながらも、・・・非国教会の教会が公認されたことの意義は大きかった。」(同 p.179)「こうしてイギリスは国教会制を維持しながらも事実上は複数教会制へ移行することになったのである。」(同)

「ここに数十年にわたる絶対王政と議会同の抗争は終りを告げて議会主義の上に伝統的王朝を保持する制限君主制(立憲君主制)が成立し、ここに議会の主権とコモン・ロー

の支配が確立した。そしてそれは、大地主と大市民の政治支配を確立し、その後、イギリスの社会と経済は遅く資本主義の方向に発達するのである。」(『イギリス史』p.175)

ウィリアム3世は、名誉革命後絶えなかったスコットランドの一揆を討伐して、アン女王即位後1707年、スコットランド議会の英国議会への合併が承認され、大ブリテン王国が成立した。(同 pp.189-90)

3. 産業革命期の英国社会とウェスレー

「名誉革命を理論的に基礎づけてこれを擁護したのはジョン・ロック(1632-1704)」であった。彼は、17世紀後半から18世紀始めにかけて思想界に君臨し、「知的革命を成し遂げた。」(『イギリス史』pp.177-78) ロックは、「人間は理性と感覚という自然的能力によって神の認識にたつすることができる」(『イギリス宗教史』p.182)と考えたので、政治や社会の制度は、人間の自然理性に照らして批判され、考察されるようになっていった。(『イギリス史』p.178) 1690年、ロックは著書『二つの政治論』の中で、「理性こそ自然の理法だから、これに問う人は、自分達がすべて平等であり、独立的であり、他人の生命、健康、自由、財産を侵害すべきではないということを教わる」と語った。この言葉で代表される彼の啓蒙思想は後の世の常識となり、「19世紀イギリスの有力な思想」となった。(同 pp.177-80)

「理性の時代」とも言われる18世紀は、宗教や神学よりも啓蒙主義や哲学が重んじられる時代であった。名誉革命と同時期に活躍したジョン・ロックの『キリスト教の合理性』や『寛容についての書簡』は、理性や寛容の精神の重要性を説いている。(『イギリス宗教史』pp.182-3) 藤本満は「ロックが打ち出した寛容論こそキリスト教が立ち返るべき真理と愛の考え方が説かれていました」と、キリスト教会のあるべき姿をロックの理論に重ねる。(藤本満著『同』p.142) 藤本の解説はわかりやすく、「理性の時代」の理解を深めてくれるので、しばし、藤本の著書『歴史—わたしたちは今どこに立つのか—』を頼りに、この時代を紐解いてみたい。

藤本によれば、ロックから影響を受けたヴォルテール(1694-1778)は、寛容が生み出

す多様性の価値を次のように表現している。「もしイギリスに宗派が1つしかなかったならば、その専制は恐るべきものになるだろう。もし宗派が2つならば、喉を切り合うだろう。しかしイギリスには宗派が30もあるので、みんな仲良く幸福に暮らしている」(第6信、『世界の名著29』90頁)と。寛容が多様性を生み、多様性が幸福を生むことを実によく言い表している。

藤本は、また、「啓蒙とは何か。それは人間が、みずから招いた未成年の状態から抜けることだ。未成年の状態とは、他人の指示を仰がなければ自分の理性を使うことができないということである」というカント(1724-1804)の言葉も紹介し、過去の教会が、独善的な態度で他の考え方を認めなかったことを非難する。そして、「18世紀のプロテスタント教会を導いていくのは国家によって統一された教会ではなく、個人や共同体の自由が尊重される教会です」と、自由の大切さを強調する。(同p.143)。

「16世紀から17世紀へかけてのはげしい宗教上の対立が信仰の自由の原則の確立によってようやく終わりをづけ、それとともに宗教的情熱も影をひそめて、それに代わって宗教批判が登場してくるのが18世紀であった。」(『イギリス宗教史』p.181) 17世紀のピューリタン革命、クロムウェルの共和制、王政復古、そして名誉革命を経験した英国民は、民主主義の精神に芽生え、当然の権利としての信仰の自由を求めようになると同時に、未成年の状態から卒業して、自分の理性を使って考えることを覚え、教会には懐疑心を抱くようになっていった。その背景には、当時、影響力を持ち始めた理神論(deism)があったが、その元をたどれば、「ルネッサンス的なヒューマニズム」があった。(同)

個人の自由の強調は、英国人にとって、マグナ・カルタ(1215年)以来の伝統であるが、18世紀英国においては、まさに、時代の潮流の一つであった。J.ロックをはじめ、ヴォルテールやカントなどの啓蒙思想家達の影響によって高められた個人の自由の思潮が経済社会倫理思想と結びつき、資本主義や産業革命の精神的支柱を作っていたと思われる。

16世紀半ば、エリザベス1世の積極的海岸発展開始によって、海外市場の開拓と資本の原始的蓄積が行なわれた数世紀の間は、「イギリスの資本主義の発生過程」と考えられ

るが、それ以降「イギリス革命とこれによる議会制度の確立が、内においては旧制度を除去し、産業の自由を実現し、金融制度を整備して、経済発展への大道を開いた。」
 『イギリス史』 p.192)

国外に対しては、「航海法、保護貿易、海軍の増強、植民地獲得戦争等」によって、初めは「オランダの世界的商業覇権を打破し、続いて、長期にわたる対フランス戦争によって」その「植民帝国形成の野望を粉碎した」。こうして、英国は、「広大な植民地と世界第一の海軍力を持つ大帝国」に発展していった。(同)

以後、「全世界にわたる広大な市場を獲得し、資本を蓄積」した英国は、産業革命への準備を完成させ、1760年代、いよいよ産業革命の時代に突入する。(同)

産業革命による急激な社会変化が起きるころの英国は、まさに理性の時代で、教会は低迷していたが、同時に、それを打破するような「一種の宗教復興」の動きもあった。「この宗教復興のさがけとなり、また中心ともなったのが」、ウェスレーによるメソジズム運動である。(『イギリス宗教史』 p.190)

だが、英国がフランスを撃破し大勝を博した七年戦争後のパリ条約(1763年)の後ですら、フランスとの戦いが終わったわけではなかった。北米では英仏の代理戦争が続き、その結果は、フランスが支援したアメリカ合衆国が独立(1776年)し、その後の南北戦争(1861-65年)でも、フランスが援助した北軍が勝利し、どちらも英国が敗北した。かくして、英国は大陸の列強国への警戒心を緩めることはできなかった。当然、英国の一般大衆の青年は海軍や陸軍に動員されて、使役させられていたから、そのことにまつわる憂いも少なくなかった。

ウェスレーが活躍したのは、英国がオランダ打倒後、フランスを海外発展の新敵国として、英仏植民地戦争を繰り返す、その後はさらに、舞台を北米に移して英仏代理戦争を始めた、外にも内にも憂い多き激動の時代であった。(『イギリス史』p.190) かくして、英国は、政治的にも思想的にもヨーロッパの大国とは距離を置いた *via media*(中庸)の位置に立つようになった。

英国内の憂いは、戦争だけによるのではなく、資本主義の発達や産業革命によるとこ

ろも大きかった。資本主義の発達と産業革命によって英国の文化や経済は著しく繁栄したが、その繁栄の影で、大多数の労働者は、低賃金で過酷な長時間労働を強いられ、非人間的な暮らしを余儀なくされていたからである。

それは、都市や炭鉱の問題であると同時に、「産業革命への労働力の供給源」となった農村の問題でもあった。「従来小規模にかつ断続的に行われつつあった土地開墾込み運動(エンクロージャー＝農地の集中)」は、農業の資本主義化が進むにつれて活発になり、1760年頃から激化。国家権力をもって強制的に遂行されるようになった結果、農民が農地から締め出され、その多くが都市や炭鉱へ流出し、男女子供の区別もなく、劣悪で危険な労働に耐えるしか生きる道がなくなったからである。(『イギリス史』 pp.193-6)

産業革命による都市化で急増した生活困窮者に対して積極的に伝道する体制を作らなかった英国国教会が低迷していく一方で、ウェスレーとその仲間たちは教会堂から町に出て、一つ一つの問題と丁寧に向き合い、積極的に働きかけ、労働者が直面する種々雑多な問題を解決するために愛の奉仕活動を行なった。また、当時流行の啓蒙思想や理神論を織り込んだ、しかも分かりやすい説教で聴衆の心をつかみ、メッセージ性のある讃美歌を共に歌うことで共感し、さらに、伝統的な聖餐式も執り行うことで神の祝福を体感できるようにした。彼らは、ただキリストに倣って、病者や貧者を見舞い、寄り添い、諸科学の専門的な力も借りて、社会支援のネットワークを広げながら、説教と讃美歌と sacrament による伝道に心を込めたのだが、彼らにとってのその自然なやり方が、メソジズム運動の特徴と言われるようになった裏には、社会環境の激変にもかかわらず、旧態依然とした伝道から脱却できなかった英国国教会の体質が見えてくる。

ウェスレーは、「自由」を重んじたが、J.ロックの人民主権の思想とは異なり、政治的には保守的立場を明確にした。

ウェスレーは、1770年代に出した「権力の起源に関する諸考察」(Thoughts Concerning the Origin of Power, Works XI:46-53)の中で、「権力は神のみ由来する」(p.53)と語り、政府は神が建てたと、政治組織を市民の保護者として肯定した。そのため、政治権威に対しては服従と無抵抗を貫く「名誉革命体制の完全なる支持者」で、新トーリーであった。

(清水光雄『ジョン・ウェスレーの宗教思想』日本基督教団出版局、1992年、p.85)

キリスト教倫理は安定した秩序の下で働くと考えたウェスレーは、会員が過激に走ることを抑制し、ゴルドン暴動(1780年)などの暴動にメソジストを関与させなかった。このゴルドン暴動以降、メソジズムは落ち着いた宗教運動だと社会的信用が高まり、会員が増加した。(Ralph E. Reed, JR., "From Riots to Revivalism: The Gordon Riots of 1780. Methodists Hymnody, and the Halevy Thesis Revised", *Methodist History*, April 1988 (Vol. XXVI Number 3) p.176)

政治的保守主義者であるウェスレーは、また一方で、神より与えられた個人の権利としての自由の保証についても、強く主張した。(Peter Grassow, "John Wesley and Revolution: A South Africa Perspective" .L. Maddox ed. *Rethinking Wesley's Theology*, p.21)

ウェスレーは、1772年の「自由についての諸考察」(*Thoughts upon Liberty*, Works XI: 34-36)の中で、個人の基本的自由を次のように主張している。

私は私の選択により、あらゆる点で自由に生きる。私の人生、人格、財産は安全である。私は何人の楽しみのためにも殺されず、不具にされず、拷問を受けることはない。私は投獄されず、手錠をかけられない。(Works XI: 42)

この宣言は、現代社会に住む我々にとっては当たり前の権利であるが、当時においては、J.ロックの市民的自由の思想を継承する新鮮なものであった。ウェスレーは、「市民的自由」と「財産所有の自由」について、次のような表現も使っている。

彼らは他のいかなる国民にも知られていない、偉大なすばらしいものを現実享受している。つまりそれは市民的自由、財産所有の自由(civil liberty, a liberty of enjoying all our legal property)である。(Works 7:403)

この表現から、ロックが統治の究極目標とした「所有権」の保全が名誉革命以降の英国の王政下において実現し、英国国民は、それまでに経験したことのない宗教的、政治的自由を享受し、世界の模範になっていたことが推測できる。

清水光雄によれば、これらのウェスレーの政治思想は、彼のアルミニアニズムの神学に由来するものである。(清水『同』p.85)

18世紀英国は、犯罪法と刑務所の管理が不適切で悪名高かった。そのため、個人の基本的自由の権利を主張するウェスレーたちが、その活動の初期の頃から、監獄改善運動にかかわり、大きな成果を挙げてきたことは承知のごとくである。

だが、彼らが関心を持っていたのは決して英国人の自由の権利だけではなく、広い世界の人々の人権問題にまで及んでいたということが、奴隷解放にも力を尽くしたことから理解できる。

ウェスレーの視野は広い。世界中の人々の自由が保証されることを望んでいた。

世界のすべての人が、自由を求めている。呼吸する者は誰でも、教育や芸術に先立つ自然本能の一種によって自由を呼吸する。また同時に、すべての人の理解力には、理性的本能(a rational instinct)としての自由がある。われわれは、われわれの理性に反するのではなく、われわれの理性の結果として自由を渴望することを感じる。

(Works XI:34 *Thoughts upon Liberty* 私訳)

アメリカ独立戦争が始まるころ、リバプールの港には、136隻の奴隷運搬船があったという(J. Wesley Bready, *England: Before and After Wesley* (London: Hodder & Stoughton, 1939) p.102) この船をウェスレーは、説教に来るたびに目にしていた(『日記』1777.4.4.)。黒人奴隷は、アフリカから英国領土の新大陸アメリカのプランテーションに輸送され、英国、西アフリカ、アメリカとの間で三角貿易が行われ、英国の奴隷貿易は、巨大な利益を生んでいた(Bready p.103)。

そして、1777年、アメリカ独立戦争の渦中において、ウェスレーは「国家の状況を顧みて英国国民に真剣に告ぐ」(*A Serious Address to the People of England, with regard to the State of the Nation*, Works XI: 140-49)を著し、翌年出版した。その中で、ウェスレーは、奴隷制を「恥知らず」で「愚かな神への冒瀆」(Works XI: 148)と告発し、その罪悪の

故に英国は神の祝福を受けることができずに苦しみ、破滅に瀕していると言う。

このような厳しい告発文書や「奴隷制への諸考察」などの啓発文書、あるいは礼拝における説教によって、メソジスト教会の会員たちは少しずつ啓蒙され、1780年のアメリカ・メソジスト年会では、奴隷所有が神と人の法に違反することを宣言するに至った。(J. H. Nichols, *Democracy and the Churches* (Philadelphia: Westminster, 1951) p.70)

ウェスレーは、英国に降りかかった産業革命やアメリカ独立戦争、あるいは、奴隷貿易や奴隷制などの不幸の原因を、英国国民の罪の結果と見定め、英国を救うことができるのは神だけであると語った。そして、英国国民に、罪を悔いて、神に帰るべきであると訴える。

しかし、すべての身分、階級の人々にあらゆる罪悪が豊かにあることは明白である。それで我々が剣で罰せられる時、我々の国民の一つの主なる罪は、我々がアジア、アフリカ、アメリカで流してきた血であることは否定しがたい。・・・アフリカの貿易は、まったく不正である。それは血の代価である！ それは血の貿易であり、我が国土を血で汚したのである。(Works XI:125)

(注) 矢崎正徳『18世紀宗教復興の研究』福村出版、1973年、p.127でも、これと同じ個所を重視している。)

ウェスレーは、英国国民の不信心や不道徳や不正や搾取、また、恥知らずの奴隷制や血の貿易によって神の怒りを買ひ、神の裁きが下っていると訴え、悔い改めによる神との和解なくしては、国の存続すら危ういと警告する。

聖書は、偉大な王国の興亡の説明を十分私たちに示している。

それは正に次のことである、国家は美徳 (virtue) によって興り、悪徳によって滅びる。「正義」のみが「国家を高め、罪はどんな国家にも非難叱責となる」(Works XI:125)

ウェスレーは、産業革命やアメリカ独立戦争という深刻な社会状況の中で、宗教指導者として、英国国民に極めて適切な意見を提示したと言えるだろう。

しかしながら、奴隷の基本的自由については高らかに主張したウェスレーも、前述したように、政治的には保守主義者であったため、アメリカの独立という政治的課題に関しては、1775年、「我がアメリカ植民地への冷静なる提言」(A Calm Address to Our American Colonies) を出版して、英国支配からの独立に反対した (Works XI: 80-90, Richard P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodist* (Nashville: Abingdon, 1995) pp.262-3 Some observations on Liberty. Works XI: 90-118)。

これは、ゴルドン暴動への関与を防ぎたかったのと同様に、過激に走ることを嫌ったウェスレーの本心であり、英国共同体の社会分裂を恐れたためだと推察される。

けれども、アメリカ独立後、ウェスレーは、その独立を尊重し、再び、アメリカのメソジスト教会の復興に力を尽くしたことを付け加えておく。

時代を少し遡り、アメリカから再び、英国国内に目を向けよう。

ウェスレーらが長年取り組んだ監獄改善運動や奴隷解放運動は、宗教復興としてのメソジズム運動によって覚醒させられ、高められた民衆の社会的良心や社会的道徳、或いは啓蒙思想に育まれた博愛主義や人道主義といった時代精神に支えられ、成功に導かれたと考えられる。が、産業革命の渦中で彼らが問題視したのは、むしろ、囚人や奴隷だけではなく、混迷する英国社会で、抑圧され、搾取され、絶望した沢山の貧しい労働者や病者、婦人や子供などがいた。急速な近代化の波で下層階級に追いやられ、英国国教会の牧会や配慮も及ばず、無知と悪徳、不潔と悲惨の中に放置されたあらゆる貧民とその暮らしが、彼らの救済の対象だった。ところが、魂の救いが必要なのは、決して貧しい人々だけではなく、成功を収めて豊かになった人たちの中にもいるということに段々気が付いていく。そして更に、救いが必要なのは、そういった個人ばかりでなく、その共同体である社会全体、国全体であることに気付かせたものが、産業革命やアメリカ独立戦争や奴隷制であった。

貧困は個人の怠惰や罪に起因するという従来の考え方に初めは同調していたウェスレーたちも、貧しい人々に伝道し、寝食を共にする中で、貧困を個人の責任だけに帰する当時の風潮に疑問を抱くようになっていった。そして、貧困はむしろ、社会的不平等に

よる劣悪で不衛生な暮らしや教育の欠如といった、社会全体が担うべき社会構造悪ではないかと考えるようになった。また、資本主義経済の発達にともない、富が集中して豊かになっていく人たちにも心を向けるようになっていった。

その結果が、メソジスト教会を特徴づけている、広範囲な社会活動である。宗教の小さな枠にとどまることなく、労働者が背負わされている困難を軽減し、解決するために、そのひとつひとつの問題と丁寧に向き合い、その支援の輪を広げた。メソジズムが主導する慈善事業、学校や日曜学校における教育活動、及び医療福祉活動は少しずつ成果をあげ、苦境から脱した人々からの信頼を集めた。そして、そのことが、富める人たちにも、キリストの体に連なる機会を提供し、救いを実感させていった。こうして、ウェスレーらの活動は、貧者も富者も取り込んだ、社会全体を対象とした「神の国」実現に向かって発展していった。

マックス・ウェーバー (1869-1920) は、有名な著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で、「商業が拡大し、投資が盛んになっていった当時の資本主義経済の発展を担ったのは、17世紀に登場し中産階級を形成したピューリタンであったと主張したが、「ピューリタンが、世にある職を神からの召命であると考え、そこで勤勉と儉約を実践するとき、必然的にピューリタンは経済的成功をおさめるようになった」と、藤本満は、歴史的事実としてのプロテスタントと資本主義経済の発展の相互関係を説明している (藤本満『司』 p.153)。同様に、ウェスレー・メソジズムも「隣人愛と慈善に熱心であったにもかかわらず」「資本の拡大」に少なからず寄与したと考えられる。

初期メソジズムの会員は貧しかった。しかし、説教「金銭の使用法」(Works IV: 124-36)で、ウェスレーは、「できるかぎり得よ」(Gain all you can)、「できるかぎり貯えよ」(Save all you can)と教えた。その結果、マックス・ウェーバーが指摘したように、勤勉・節約・正直といった倫理によって多くのメソジスト会員が成功し、社会的地位を上昇させ、豊かになっていった。けれども、メソジストの会員が成功し金持ちになるにつれ、宗教的に墮落することを恐れたウェスレーは、成功した会員に、メソジズムの組織を通して施すことを教えた。それが、次なる教え「できるかぎり与えよ」(Give all you can)である。

ウェスレーは、キリスト者は「神の執事」として、神から委託された金銭を上手に管理

して貧しい人に与える務めを負っているということを説き論じた。そして、金銭(タレント)は貧しい人々施すことを通して、その持ち主なる神に戻さなければならぬことと同時に、慈善を通して、施す者も施される者も共にキリストの共同体の一員として神の祝福を受けることが出来るということを教えた。

(「魂を死から救う手段」『著作集』V: 374)

かようにして、ウェスレーは、急激に発展した資本主義社会に内包された矛盾の中で見捨てられた「いとちいさきもの」にも、また、資本主義経済の発展と産業革命の中で成功して富を得た富裕層にも、有効な救いの手を差し伸べ、幅広い支持を集めることに成功した。

ウォーナーによれば、18~19世紀のメソジストの成功は人格的性格の変革による個人の社会復帰であり、それは宗教的共同体の相互扶助による連帯とその構成員の教育による「責任ある性格形成」にあり、産業革命の混乱期、社会秩序の回復によって個人が活性化されたことによる (W. J. Wamer, *The Wesleyan Movement in the Industrial Revolution* (NY: Russell & Russell, 1967) pp.275-80)。

地方工業地域で、「浅慮」「信頼不能」「不注意」と言われた労働者たちが、ウェスレーの伝道によって変えられ、「堅実」「節制」「勤勉」等々の諸徳性によって社会的にも信用され、良き市民となって、社会的地位を高めていったことはよく知られている。その根底には、自由の概念の広がりによる抑圧されていた人々のエネルギーの解放が考えられる。(著者の拙論「18世紀メソジズムの『自由の概念』について」ウェスレー・メソジスト研究 6を参照されたい。)

エルンスト・トレルチは、『プロテスタンティズムと近代世界』(『トレルチ著作集』8~9巻 ヨルダン社 1984年)の中でメソジズムを近代化と個人主義の形成に貢献した宗教運動として評価し、次のようにまとめている。

メソジズムは、無力な、まさに工業化によっておちぶれた大衆の中にある人格性と個

人性への欲求を導き、慈善活動によって彼らを困窮から助け出した。その他の点についていえば、その倫理は、回心の感情的性格をますます組織的に規律化した聖化倫理および広範な職業倫理とによって補完したものであるが、それは徹底して国家や社会を保守しようとするものであった。選挙法の改正、奴隷の解放、博愛事業、しかしまた厳格な安息日の聖別、近代の教育、学問、芸術に対する闘争は、社会問題に対するメソジスト派の立場を特徴づけている（『トレルチ著作集』IX:53）

ウェスレーの運動の中心は、あくまでも聖礼典復興運動である。けれども、産業革命の繁栄の陰で急増する貧困とそこから派生する数々の諸問題を、几帳面なメソジストらしく注意深く見直し、キリスト教倫理の視点から、細かく対処してきたことが、結果として、個人と社会の変革をもたらしたと言えよう。

注目すべきは、救済と聖化の対象が個人から社会に拡大したことである。ウェスレーは、キリスト教を個人の救済だけでなく、共同体社会を救う宗教と信じていた（『著作集』IV: 7-13）。（Bready, p.202）そのために、中世の有機的キリスト教共同体社会を、都市化と産業革命の進む中で、新たな装いのもと、再興しようとしたのである。

ウェスレーは、当時の英国社会の問題を深く理解し、その様々な危機から英国を救うために、キリスト教道徳をその中心に据え、神との和解が不可欠だと考え、宗教復興を実現させた。

神の国「the Kingdom of God」の理念に基づき、霊的な共同体の再興を目指したウェスレーは、結果的には、フランス革命よりも半世紀も早く、「自由・平等・博愛」の精神を先取りした霊的共同体を実現させた。（Bready, p.205）

メソジスト教会の社会的活動を、ウェスレー神学の受肉（incarnation）として見るな6魂と肉体に伝わり、同時に、救いを求める人々を「キリストの神秘的体なる教会」（Corpus Christi Mysticum）に回帰させることで、共同体の再生にも力を発揮した。

4. まとめ

18世紀後半、英国は多難で、憂いご満ちていた。国外では英仏間の覇権争いが長期間続き、国内では産業革命による都市化と資本主義化の中で、貧富の差が増大し、社会問題が急増した。その状況に、多くの労働者は絶望し、社会的緊張は極度に高まっていた。本来ならば、暴力革命が起こるところであった。ゴルドン暴動など、その動きは実際であったが、ウェスレーは、宗教復興と多種多様な慈善活動によって、この状況に適切に対処し、個人と社会を危機から救った。

彼は、愛と知性に満ちた慈善活動を展開させる一方で、英国が直面する諸問題の根本的な原因を英国国民の罪と見定め、その救済のために宗教復興を掲げた。人々が良き市民となるよう惜しみない援助を続けたが、英国国民が悔い改めて神と和解しない限り、救いはありえないと考えた。そのために、聖餐式の復興に力を入れた。

ウェスレーが目指したものは、この世における「神の国」の具現化であり、国教会や英国社会から見捨てられ、孤立していた人々を sacramental な「恵みの手段」を通して、「キリストの神秘的体なる教会」（Corpus Christi Mysticum）に回帰させることであった。そこにおいては、貧者も富者も区別なく、共に生かされ、助け合い、「自由・平等・博愛」の精神を享受できる、霊的共同体の理想が描かれていた。

その理想がどこまで実現したか、評価はまちまちであろうが、少なくとも、監獄改善運動や奴隷解放運動では、歴史的快挙を成し遂げた。また、社会的脱落者と思われていた沢山の労働者を勤勉で堅実な模範的市民に変革し、後に、そこから、弱者をサポートする側に回った者も少なくない。労働組合、農民組合や労働党、工場法、炭鉱法、チャーチスト運動、また学校、病院、救貧施設や孤児院など、様々の領域で、現代につながる近代社会の基礎を築いた点でも、反論できる者がいるだろうか？ また、ウェスレーが、社会の仕組み作りの前提となる社会正義や人道主義の精神を涵養した点でも、異論はあるまい。

決して、ウェスレー一人の功績ではないが、キリスト教史の流れを見た時に、J.ロックやウェスレーの時代に、潮流が変わったことに気付かぬ者はいないだろう。ウェスレーが時代を変えたのか、時代に作られたのか、恐らくその両方であろうが、名誉革命から

ウェスレー誕生まで、15年しか経っていない。

ウェスレーの「私は何人の楽しみのためにも殺されず、不具にされず、拷問を受けることはない。私は投獄されず、手錠をかけられない。」という基本的自由の宣言文を読み、我々は、ウェスレーが、あの血生臭いキリスト教史の、如何に、接近した位置に生きていたかを知る。

だが、我々もまた、危機に瀕している。我々の世もまた、血生臭い。核の脅威などは、いかなるものか想像すらできない。

そして、ドイツで既に始まり、今、「猛烈な勢いで動き出している」という第四次産業革命とは、何なのか？ 「生産者をサポートする機会とITの融合的な発展」と説明されても、それを喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか、それすら分からない。(三橋貴明著『第4次産業革命』徳間書店、2016年 p.30) ただ、「新しい技術は必ず技術的失業者を生む」らしいことだけは、なんとなく分かる。(同p.38) かつて「産業革命と機械化による失業を恐れたイギリスの労働者たちは、工場や機械設備を破壊してまわった」という。「それに対し、イギリス政府は1812年に機械破壊をなんと『死罪』とする法律を成立させ、・・・15名の労働者が処刑された」という。だが、「利益の最大化を追求する産業資本に支配された産業革命期のイギリスはインドに対してさらに非人道的」であったという。恐ろしいスピードで進化を続けるAIを前にたじろぐ我々と、18世紀、蒸気機関車に驚かされた人々と、一体、何が違うのか？ 今は、人権が認められているとは言え、やはり、他人事ではない。(同pp.39-40)

そして、忘れてはならないのが自然の驚異。地震・津波・雷・洪水・台風・雪崩・竜巻・火山の噴火・・・等々かつて無いほどの自然の驚異にさらされている。これも、「もしかしたら、神の怒りではなからうか？」と、信仰のない人たちからさえ、こんな問いが発せられる時代である。

アメリカの未来学者レイ・カーツワイルが提唱したシンギュラリティという概念が話題になっている。どうやら、「コンピューター・テクノロジーの進歩が指数関数的」であることから、2045年には、現在の10億倍の技術水準に達し、「人類が『労働』を提供

する必要がなくなる」までにAIが進化すると言う。(同 p.78, p.210) これをもって第5次産業革命と呼ぶようだが、経済評論家の三橋貴明が言うごとく、「労働が不要になった社会が、ユートピアなのか、ディストピアなのか」「現時点では誰にもわからない。」(同、p.32) ただ、「過去の常識がまったく通用しない」(同、p.76) 社会になるらしい。

18世紀、ウェスレーは、苦しみ惑う英国国民に、己の罪深さを反省し、悔い改めて、神に立ち返るように、そして、互いに助け合って「神の国」を地上に作るように提言した。

今から約30年後の2045年、ユートピアになっているか、ディストピアになっているかは、結局のところ、我々が悔い改めて、地上に「御国を来たらせたまえ！」と真剣に祈り、また、そのために、力を尽くすことができるか否かにかかっているのかもしれない。

内にも外にも憂いと悩みが満ちた世界の中だからこそ、今一度、ウェスレーの言葉に、真摯に耳を傾けたい。

(共愛学園 前橋国際大学 准教授)